





東照宮第二

德編卷之二

明治十九年  
 八月  
 點查章

東京文化会館  
 33.7.30 本  
 36251

下代徳大名武公陪臣すゝ生氏を平一聞き  
 尚ふ生者不仕合威も昔哉思ひ初て視を  
 然も汝等は弟氏を親れ子を祀はるるも小  
 世よ生よそ若く是道空良の族くある惣志  
 亡一給とや一是天下浅治むる第一の良  
 子細小火の煙も消火大火の水も消し去りぬ

A 269  
 7  
 1A-2

ききと眼前に事なれども根の事をも皇家  
の治乱を計す一悪の長せざる先小早く防さ  
ざる一少くも許さず事なれば又彼孫房  
が我小早く叶ひし事な類之然り識ふ不思談  
成老を我の心の内小入るよりも我心を知諫  
言の事も中々我思ひ寄がさるを云ひし  
猶まとも奢強き事己の智恵分限を以の外  
を分たりと云ふやを某怒り知しして危犯  
事小遊ひ入り末代小しと云ふ者心付き所之

世々の相口の者をつふ時唐の玄宗の楊貴妃  
を考(給)と云ふ一孫房奢強く我のを  
去実小不思談之只是己の身小入るを思ひ  
灰色の謀をめぐし入り末代ともしぬ奴の  
者は天下皇家の禍を成と知く奢強か  
さる事小早く取ひし一又汝も心付し  
孫房を使ひし時 法康玄の石仕建一先老  
ともあり御小早く切もなざるゆなり  
一而度も先切の者との云ひ一事を困ひし

何なるも縁で前々云ひし一りも有り少くもな  
小事の苦しき事候と思ひ云合せりゆを替へ  
ゆて家老とも我ふ素直な来りかまじ初め  
家老の云ふを我とて請ふ後變改するは  
惡敷とたひ目見花見れ會つりとも初同心  
しと變改するは若後云ひしと勝まて  
能くなくとも始末云ひし家老を寄せ會談さ  
せし前後をえと勝まする方小一味同心を根  
付きしと申す

御道訓  
下因

一 柳系諫言をいふも延くをを己の身の飾り小  
云ひ己の威を強く仕分者者も十八百人八百  
人とも小悪迷を主人ふる者れ專要小考小御  
ゆく是を大形小吟味を家老を破り身残  
失ふを就中汝がとい天下れ大ゆ小ぢるを根  
事をつたひいふ不及を異國の事まをす  
吾惡も小大なりて誰し知る事之少一の  
内小具小聞の專要又汝等始め家老の上  
乃事小隠し目付を云ひ付目と被る小言若

言及なる事有り時矣兄小知ある一一定て  
 將軍もいふらん侍もいふらん一もいふらん  
 上意成一時主計にト上意 上意此如私武  
 士もいふらん 後波の此日付元ハ誰とも存  
 せしむらんト上は此を又 上意不越して此を為  
 深く執る者は身を忘る忠信の心込入る  
 物と不沖の心も此を我なり威を云ふ  
 知れをいふ心少くもいふらん忠信をいふ  
 一 源義経の郎等ハ一騎當千の者とも義経の

情小戯 義経所領なけむとも面々食を求め  
 主を養ひ身命投うちなり 我家も是に  
 似る事有り 成濃集人なり 此木の心をいふ  
 心許なり又隠 因付を云ひ付るとも家老を  
 心許なり思ふそのものもいふらん心許ハ我  
 家我れも程少く心許なり思ふ思ふ心許  
 あり思ふ程なれも家老とせば家老も亦主君  
 の家老にも思ふ思ふ心許なり思ふ心許  
 明く宋之家不順少く云ひて家老為小は

方命を惜む事なく親の子を以てつとめて法  
人を憐れ家法なげくを以て家老といふを親  
子の平くすす可なるを好むものと家老の  
家を思ふは心そまわらざるを子あつらふは  
程きやうあれとも親の子を思ふ程其実成り法  
又我のを捨て他人の子を思ふは「我も  
美能を教ふや」に諸人に入法可也「又  
のほろ所の能を取用して於て事なれ只我  
身六根手足を以て人を取用す

目の用は耳鼻の用あり壁すも同  
鳥むれとも空は空を飛く能あり橋も水も  
入る用あり向ればものりれも一人ふ何をも  
備へん事を求む可也

一 甲州勝頼信玄の代法は第一生初の合戦不  
武道達者の家老とも未だ考へずして  
諫言を用ひて「各分別第一の流於長坂一  
寸息を知りて諫言を用ひて我々の利を得れば  
の謀を用ひて老切の家老の諫言を用ひて思

小を考ひ方立し有り武功の家老ハ時の合戦  
勝負ハ大旨小計里以末家の成仍を備考一と  
諫めければ勝頼一偏なりて悪戦ハ家老の  
智謀ハ困ひを忠信むかひて成之家老悉  
討死して家終ふ之し有り又関白秀次木村  
ハ大坂城より水指の蓋取来りし一十八日  
て是城賞賚し秀吉の大恩を忘せ忽ち  
らき有り必武道不案内成者ハ空分別ありて  
先成知より相とて成小竹あり聴病聴病

者はかろふて奢里強く奢里強者ものも  
依怙具負ありゆは者は一門家臣を始め大身  
成者程頼ふなるとは根成者も身の程を  
十天の時をも考へて一村知りすきて一郡を  
取一郡知りもきて一國し子小入一屋領を  
天下しゆまきゆふ心は敵の大小強弱も  
辨(を空分別)して天下は騒動と成物を  
是武道不案内の故之武道不案内なれど  
必私欲なく成者之私欲なく成時主國民

は建亡國となすも 武蔵の達人ハカキそのおも  
不義をたはなすも 子細ハ不義邪惡小は  
致ク 怨負も子細知る亂道を正ハ仁義を  
守ふより 必謀叛心もあすも 執事とも  
存不度ハ云ハ聞生もよく 左前の曲名も  
つきくハ他城心をもつ 叶ハるも只ハ前乃  
恨をも 第一不世ハ日本此諸大名を外未述  
為外をハつとも 子細高師也ハ奢里為外ハ  
あきて 尊氏ハ恨ハなき者 謀叛ハ石田ハ

奢里ハあきて 秀吉ハ恨ハなき者 うとも  
ともより 侍ハ入以候作法 天ハ此大名心入仕  
並生家ハの 卷中ハ野人ハ作法を能ハ正  
聞通ハ 天下乃礼の本ハ 將軍を始ハ老中の  
偏りより 亦来る物ハ 近來家老ハ此修ハ依  
生主君若ハハ 上杉ハ管地ハ原ハ葉ハ原  
原ハ古城ハ今川ハ 三浦斯波ハ 朝倉三好ハ 松永  
大内ハ 陶赤松ハ 浮田浮田ハ 長船武因ハ 跡部  
長坂ハ 生ハ 以類ハ 多ハ 爰ハ 以ハ 國ハ 入事ハ



能く手後を臣下を長せざる亦不取らざる給  
しや

一 又上素竹千代并國など小附する人を能く  
吟味仕置る根小中道一父子此間の滞りハ  
皆家人より起るなり叔子供の智恵を計りて  
我若年此時分と思ひ合せたるなり我  
三郎を此時も早く成人させ一方の大將と  
なり少くも早くも廣く申す申す思ひ彼ら  
年乃考へさせしと智恵付ぬものと思ひ

こゝろ不足がこゝろ不足と思ひ附並者としける  
をさせぬる温平は諫を申さぬ裁度なりとて  
少一の事をも敬愛云ひ一丸三郎小付なり  
公勸る者とも改易なき中付る中も小諸人  
心は悲ししとて是は嫡子小正公仕立と申付る  
時を人々勇く進み候とて申すを驚愕  
其家も盛小成（き小三郎小附）正公人  
の覚悟の根ふては怒昂也（き根な）子女不  
附る者公人も親の仕ふ者より威勢ある

能く子細く春日大明神、藤原元祖之  
以故、春日に御祭、近衛家孟を去り、明  
神小まつせざる終末、尊氏の本公家武家  
とも小喪せり、以時近衛家より、孟を  
上より代の事、今末世、私益上中事、何  
成とて別乃土器を神前、小を之、清酒をつき  
此より、孟益別破り、けれ、近衛家、孟  
世成、い、とし日月も地も不落、は、けるなり  
と、涙をこみ、れ、うりと、是、い、春日乃明神

生子孫、小成なる、ふとの神意なり、我、三、前、小  
こりて、か、い、ふ、を、以、り、悉く、將軍、小、中、一  
子、依、養育の事、い、只、家人、小、あ、を、附、益、人、を  
吟味、仕、我、使、不、者、り、一、入、憐、愍、深、く、仕、事、  
作、と、中、一、し、尤、汝、お、し、在、根、心、以、差、き、た、ま、い、  
云、ひ、聞、せ、よ、父、子、の、中、む、つ、ま、う、く、さ、い、人、倫  
第一の、備、り、と、大、小、下、を、大、の、う、く、の、大、事、也、  
あ、を、を、さ、れ、も、三、前、小、附、益、者、と、も、家、老、を、福、  
と、し、て、安堵の、心、なり、若、殿、極、乃、御、意、不、違、し、

中時大殿様の御最悪者とて入浴し  
在公せむとも也三郎は乳小入る者を銭悪む  
漁き為す一是唯弥前より殿親子の目と  
隔り悪事あるも面影を容み小具見せよ  
親子の目を互法とて一家老たまより小具見  
せしむ悪者を父子あつしかたれも諸人  
終るを疑す浮言も起る事ある物を以て不  
三郎は悪人まうりを撰得る事と思ひ互れ  
心付き遠くを始すも家人とて何れも身を

くつきに公主人きと思ひ入て之を止めん小は  
叶ひなき小覚也主の心小叶ふを迷惑小思ひ  
ては何れ能くなきやめぬの折を見合せ悪  
逆世差の跡は常我前少くは若殿様の御不  
覚怪何とも御笑止す若小も落常或時此  
傳何某不覚怪之又は是も若殿様は能く  
とも何某の好むと云ひける三郎は良使小  
者とも大小上下とも小身をいさす共く一日清  
の覚怪之又跡は常三郎は前少くは大殿様

左根小沙比後の事も教愛御事也といふ  
由傳よりも分別三女初ト上といふ存案  
吟味を以て女初は也といふ存案は已むと  
云ひたり却て之前ハ傳世の志ばと云ひ  
聞かふも之前と孫累ハ三前ハ三前といふ  
して其傳も入る事をして思ひ外  
其を又傳もハ女は諫めたり水小儉を書記  
ハとも此是非沙覺燈とあきれば迷  
惑作りけさとも孫累ハ三前ハ初といふ

大事なり彼も若くは沙事とも秀次  
小木村の事しつゝ悪事の例を引いて以  
てせりそ連のつむを孫累の奢至悪心  
小忍とて熱家中れ者とも大小上下とも小  
方をいひきてゆるかならん少くとも氣を  
ゆる人の心皆入息成て家中穂のふを以  
時不意れ事ハつゝも家乃滅亡かんと  
清康公より老切の志とも眉をむそめ存言  
とて此の事も孫累之に以て後細書て誠小

後悔手前唯々、そのを思ひ出せば熱身より  
汗出ると何程才智を氣不入る者なりとも  
奢るものもくく者をた根不仕ひ給ふるも  
中々、忠信深く智慧なる者少くも  
奢るものも、彼れ、所をそと者とそのは  
是れなき次第、我一世の向忘と源列との  
上表、少く、河原を流し給ふ、主計改、河原歌  
の御根林を伺ひ、より、沙理り、至極不淨なり  
を、その、神をぬきし、より

又上表、不救獲と、苦惡の行ふより、吉凶む  
く、あるを、さふ人、思し、く、思ふ者、必生、獲  
わく、我身、急、おなり、又、後、根、不、主、其、必、不  
し、ひ、より、若、主、の、威、勢、を、り、人、不、恵、外、を、を、り  
時、汝、等、の、眼、前、を、い、ま、れ、威、強、き、取、伏、し、  
か、め、とも、陰、を、い、必、う、と、む、を、諸、人、う、と、む、時、も  
忽、天、道、不、離、され、終、不、才、を、失、く、を、又、諸、將、一、寸  
先、成、志、く、を、家、類、を、い、め、民、を、苦、め、私、欲、深、き  
時、を、生、後、い、家、族、を、一、身、を、失、ひ、一、門、一、町、不

滅亡をせられたる人五十九代宣化天皇の  
謀衣衣食ハ天下の本々黄金若貫を以てし  
飢を瘞を以てし白玉千箱を以てし何を以て  
冷を以てしんやと大臣小倉して國を涉苑  
を立糧を以てしんやとひ不慮れ事を以てし  
人民の命を救ふべきと御心之人を利也と  
者天是小福し人を害を以て天是小禍  
を以てしんやと天のむすひなり又春秋の  
いふ事小倉家の政を以てしんやと時日蝕月蝕

の色すく政道惡し人民善む時蝕の色  
罵りしを以て叔尚家對して少の空礼を  
外ありしは是錢を以てむすひなり小倉家  
事を以て上下とし小倉人を善む氏の銀吾を以て  
中私款ある侍ハ天是小背て天是の大敵と  
必是錢取ひしなり凡人の善物の靈を以て  
物小捕るる生物わく皆天是の子なり然る  
時は錢を以て惡しむすひく生觀を以て何  
能せんや故小倉の子錢を以てむすひて天是必

是れ也。是れ一給之誠。小人間の貴賤貧福  
の終りハ阿婆と生老と。終りなき人々  
人をいふむ時。是れいふむ人を。必天道い  
た。給ふと。知る。一。然也。是れ。修。王。治。き。ふ。け  
者。人間の本末を。知。さ。る。故。大。身。高。位。ふ。そ  
り。智。恵。分。別。る。根。心。得。因。一。人間を。忠  
根。思。ふ。ふ。り。必。家。を。破。る。もの。を。相。又。子。不。足  
そ。こ。こ。中。に。武。士。を。武。士。を。付。く。る。能。を。上。校  
憲。政。の。子。龍。五。事。成。定。と。聞。及。ひ。ふ。ん。を

如斯の覺悟以外の外。悪おそ子を。い。は。す。ふ。は  
忘れ。せ。し。柔。弱。小。剛。又。血。氣。の。小。勇。を。この。ま。さ。し。の  
中。に。小。成。一。人の。基。ハ。慈。悲。なり。慈。悲。を。若。し  
尚。分。悪。お。そ。を。し。必。す。を。る。も。れ。を。空。意。悲。滅  
者。は。人。ふ。か。る。事。な。一。秀。次。な。の。根。不。善。意  
悲。お。し。て。人。小。成。さ。す。物。を。只。父。子。の。中。む。つ  
ま。一。志。て。か。さ。る。ゆ。え。れ。家。人。忠。信。を。お。て  
父子の中を。と。こ。な。ふ。も。れ。を。何。の。も。具。ふ。す。て  
心。成。不。納。思。業。主。一。を。生。上。少。く。具。見。を。加。

絵とト下子荒吳身して生子世を於  
身を失ひし事多きそ人れ父の意あるは  
勝手事なり又汝の心成ふれむ(其事は  
彼縁最も始め謀叛逆心の事、少くも思  
され在己の智恵浅きゆへ人をうけ見極  
められしに、停て家中こもりて、いづれを  
少て止るを得ずして敵の内通せし人、是忠信  
なき處之海志信深く、まはれ勸よ人も方子  
をとり物、奢りも惟樂大炊所(おとし

美子を習ひ勸よ

一 又上意ふ大炊若き時分某或侍小役候下付  
と思ひ彼者は何根の人物とぞ尋ねられ大  
炊下付小付者松折(終ふ不系糸所聴と不存と  
ト下付押、汝は根の者少く可成といひ、却る  
し我はます根をよむけしを子細に彼末は餘  
人の知る事候事の上れ者、うけなれは、汝  
取(出入不仕とぞ不存と、下付若く一人の  
告悪を正し能者の埋きを悪敷者下付を同



とせたる事なくし尤我、非行の時、は諫言を  
後、なふ、叔、心得ぬ事、を、その、ふ、汝、所、  
お入仕る者、も、其の、告、悪、を、も、知、り、中、他、を  
不、知、時、汝、所、お入仕、者、の内、不、能、人、ある、を、撰  
取、ふ、付、音、を、せ、て、家、中、こ、こ、り、て、大、炊、所、  
お入仕る者、は、告、悪、も、不、立、方、を、振、不、取、沙  
汰、仕、り、彼、欲、心、深、き、食、り、者、縁、を、求、て、汝、  
所、お入仕る、尤、何、程、出、入、仕、り、し、り、後、聞  
悪、お、者、然、能、と、し、自、分、の、威、を、振、不、通、き、と、は

も、思、り、義、後、ふ、し、て、天、將、を、り、丈、を、知  
た、汝、お、て、は、是、か、一、種、れ、と、し、我、家、お、も、彼、汝  
四、部、あ、ま、え、た、根、の、者、同、前、不、諸、人、汝、を、思、ふ  
時、我、目、加、祿、と、違、ひ、汝、を、惡、名、を、い、は、し、と、悪  
し、と、武、南、智、深、し、も、く、ま、れ、困、ふ、可、き、と、思、者、  
輕、重、を、な、し、不、義、成、る、も、く、之、を、生、ま、し、と、思  
ひ、お、も、の、を、た、根、の、者、も、く、し、汝、を、辱、れ、を、さ、る  
も、も、汝、の、方、な、り、と、汝、入、言、汝、不、仕、り、是、を、惡  
信、の、家、老、と、い、ふ、人、の、之、氣、衰、へ、ぬ、事、も、死、を、

わく小室も乞氣をまゝぬれて滅亡せざる家  
の盛ふらむと云ふ諸人をして為すも身の程  
を忘る諸士の風俗義理不修く柔弱卑劣  
なきを痛の心なく忠信の勵と強けれども  
頭人おし間ふ意外もぬれを想して人善時  
血案瘡子ぬれぬる人小室祀もその家  
表一ぬれぬと云ふ臺所を成とも食伴  
不飢の能と思ひ鼻がかりても息きおそ  
思ふ中も侍の風俗表ぬるより彼所家ぬき

の奢りもの縁諸侍乃頭を押ゆる必家滅亡  
をまゝものを縁家奢り強くて我家の大なる  
禍がなんとせしりとも我家小武甚盛盛  
運成運きより想して家盛成時も諸人痛  
の家滅成能ぬれ程を知り武士甚武甚  
の外他すなく義理の穿鑿深くなり痛ふ  
事なり心腹と詞を二ツなり童子の父母ふ  
遠くをく小主人家老おあつしぬも主人家老  
もあふむしと云ふ成明君臣をいふを

心は父不同一 家老も母不同一と心得  
得よ又家老の時は武を飽く柔弱兵の  
奢りもの如く權柄を取居万事已ふ心  
ら 武士の役候を忘る武をのまけし者  
當風ふ命の時をぬくくを者なりとそ  
人外の  
中ふ取成を了らぬ荒き息もはくす  
成も是家の表たる子細家職の外れ  
す多し聽ひし折し時しあれ家職  
人間も米を命と習ふ内食ふや 武家

治ふし礼國も武を忘るるや  
と云ふ命を的よりけ義理を  
と云ふなれも大言ふ志ありて  
けぬものも命程大切なるもの  
度ふ死生を安くかゝて謀成め  
しと云ふ天にかし少き侍の上  
命すて多きもれなり 徳あり  
らと云ふ天に改を成せ上登  
得心を大将と云ふ耳目鼻口  
は是れ武士

諸人と争ひ見ざるべし目聞ゆるべし再か  
りも梟あちりくは舌行くべし是打ふは取  
ふも指なり終るをとき時は同じ使ふを  
耳より行く時は不入府中時に入不入  
とて誰う是れ於んや武家は治紀とも武  
臣を捨てるを以て困るべしこれ理致知  
し武家武臣を誅るべしすべし天下  
初るは終る時も又別の武臣の事人ふ天  
下より天下武家の權柄を以て給ふ治紀

家も亡るを尤も所々の武臣を誅るべし  
私欲深るべし氏姓苦事是あは是を賊  
むる天下を知ら彼有りされも人老ぬ事色  
そろうべし力落腰をみんべし有り目  
うと其れ礼を以て或者を礼せ礼せすべし老  
おは礼を以て不慮を以て如く家も老と有れ  
主君の用も立属き告人を以て於て悪人を敬ふ  
ものも家老も家の系裔なりんべし  
盛成りく不成りく終るも治平の末

其家破まんとては今川の三浦右馬守と  
申うなる志かて奢望無きも家表（法人の勇  
氣ぬけ左衛門如きの者よし）公達仰けれも家  
の活守よりとて己の手柄の根小思ふも臆病  
者は武彦成睡ひ軍役の勤し却て  
大平とともうりといひ自分家小口を武  
威を付け女童の雷鳴れ時宗原といひ  
地震のまゝ時宗威れといふ所より  
まゝ可のをいふよ汝がとふ答しては續れて

慇懃過ぎき是も一言我といふ魚子妻成汝之意  
小侍付申ふはるなるとも申者恒為者又  
左根の者多きい半家運の末うと心を付よ  
老人の身小業を用ひ矢ををえ若妻子を名  
代小お申根小心得武彦の表（其根小覚悟  
一と静澄の世程侍の頭けい）根小河  
あけい勇家をいふお振らせ治の心成を生  
止小を養ふ小お申申ふ仕立を申す一申者の  
志ん成ふのい有ては小お申時をい根の者

とし満世公人の位吏く小知建くべきものを  
礼せり六ヶ敷の治世の仕立を徳れとも家  
の末なる所大將も大將の器量打ちゆく  
心せり我んれ根ふ一振小法ん我志なきふ  
くを新澄の時も家中治りくさるなれん  
少くふをし肯くぬき奉あ時も諸人の心  
柔弱くして降定まらざるものそ只かまそめ  
少し武士勇氣のあふ能をぬく小男の形を  
急てし心女のかくわく柔弱美業を好む者

強き者も必死に安きものそ相又汝ふハかり  
そめりも輕傷成者錢好む趣きも但又大い  
けり吾も打ち小追放せしといつをハなきと  
子細多の人の中おは色々極の者也  
されも家老れ役するはそ各悪をゆく知り告  
人あて事取取せそありの事取取人を  
郵ふむくくふ人をも役後ふりけり小ふり  
改差の好ふるぬかふとく一徳れも汝目  
の弟れ事とり知れりハ家老とふ色に

と云ひ聞せければ大炊赤面にて御尤極不  
存存と云ひ涙を流せし今大炊もと小勝  
建家老我朝不多分可成しと不覚熱にて  
心小減りたる者も至極に為程残すては思其  
儀を改む物も何根の下賤乃老れりや  
少くも至極の理破る事なりれ女手もハ  
己の威儀よく能くを聞てし改めたるもの  
左根の氣質の者も大將の家破り家老  
を亡き物も是君侍も小うけもの他法

此等又人々を聞てし者れ若くも忠告  
云ひたりしを取る者あり是又老人を  
以若く識の者<sup>道</sup>は我思ふを人々出り  
時は我々思ひ寄るや因りてやはいす  
故に各各に事いひありし者も我々  
する者も其時<sup>道</sup>に重て能く事を思ひ  
たふしはぬれ

一  
又上志に沖谷を新築小抱下付分小沖谷  
途中より雅樂小舎の腰より禮をやり小

雅楽の物を思ひけしと禮を合せず通  
りけしは夫より後神宮雅楽小あひて空  
をけしと表外も有りや聞ふより案なる  
古の思ひ隙を出す(子や思ふ)内院と  
聞ふ人おしく殊に古の儀軌由り  
今も若小隙を出しは清き人々  
を疑ひし思ふ也又雅楽の  
諸人思ふ時は多し雅楽小  
何なり又せふ少く思ひ家老威  
勢

成く家の志有りかと思ひ我分別  
知れを昔も時分古の約束と  
神宮の文思志の空聞しと定  
御の儀も儀事云今疑ひし  
何れも中買敷と思ひ知り  
八百石の折紙を  
一兩の中も呼知しと事  
思ふ所雅楽  
をけて神宮未知し  
珠の外能事  
言しと事  
神宮の御約束



未より過分な事をし不始事毎かといふ付  
されず以者も以の外成事外者と聞かぬ  
百石番下思ひ折紙を徳兵衛よりと云ふ  
雅楽中根以の外の時事少く以者なを  
尤根ふふぬかり守り能事公人時家を望み  
尸留安といふ付汝より所同心いふ子細  
我家より汝事とふ意外はも者誰うてふ  
以者い意外のも有之と聞かぬ今彼新  
を和(き)き定て暇を乞ふ尸生時暇(き)

思ひぬ(き)て(き)て雅楽尸も御意の通して出産  
結構ふまは仕か私取今御家より私を志(き)  
其れ侍者意産れ徳もふか神公心強  
不記仕か是小よりて一庵沙田不立尸者と  
もはぬぬ尸上りし頻ふ尸少知何程  
孝い(き)て(き)て雅楽尸も二千石と云  
と事存し尸少存生候言も初め約束の如  
く石(き)て(き)て雅楽是非二千石と  
云ふ時生餘れ家老とも只千五百石と云ふ

ト付神楽を以て我思ふ所と雅樂所  
存と申す也知行千五百石也此ハ以名  
あり素雅樂所不引きけ只れは若浪里  
由免ふハ極少と涙流し断里申の由其  
後々せ義人相と能く居今程ハ物段とせ  
しと勢してまふ諫言を以て時の改爲告  
を吟味し之れ為能くを注ををまの  
を武道不知の小人と推系人先おしの身の  
程をを氣遣杯と云ひるして終る身体

滅亡をまの成敗小心有者ト主君ハ、女  
諫め、我ハ思ひなく、身止滅亡、妻子  
眷屬必頭小立を悲しく、諫を云い、物々又忠  
信申して諫言を以て者却て毒不為れ悪意  
成行ハ我身才免し爾もなれとも子とも乃  
不便なる身体滅亡を苦み子とも必男  
立す、く、く、いひせ也、庶幾来ハ勇氣  
ある侍々、柔弱あり皆女人の中ハ成物を  
是家の滅亡の由を恨み、云い、同此、如く浪里小

乱を志すべし云ふは合戦をなす時に行根  
のノ賤し者少く味方小利多きを云ふ志  
一童子不遂ふとく是れかゝるを志すべく小  
治世も改むる為告事といふ時は早くかけ  
り〜一素忠義を思ふ治乱二なり大身  
小身上輩下賤の隔なきも能く心得一寸  
先志を成し治王者治世の時も智恵を以て  
只主人家老大身之信一の是あり諸素身  
下賤小利多くと覺之くまうけ我より智恵と

覚ゆものも尤是より後合戦を之を買取上り  
とも不檢ふ血付一木根なれども次舟小武彦を  
案内成一きり然る時も槍を法堂一士にけり  
をし云ふ木根ふいふやふ覺るも破ハ鈴木久  
二所杯事成しはかぎりなきは武功おふま  
鯉の料理好くやうふ武彦を案内の抱きやる  
者も心算一しら思ふ物を久二所忠信の手  
おふ身を酌りけし云ひしこそめはの勇ま  
治乱と云ふもそのを思ひしを凍る物を

後身ともより云いせざる時云いせぬ物を天下  
大半不成程ヶ根の者を賞歎し世裡不押  
込む事なきも子細生を法し皆誰の身  
命を的小掛け患中し主ふりされんを  
好まんや叶志を押し家運の末し知色治平  
の時上下ともに槍を長く海き根を共ま  
凍を強くいふ老い勇走ヶ根れ去り机世ふ  
必忠信ふし槍をつし物を主忠く老  
我方の悪きうし威勢不任し志き小方なる

者の男多し事云い依の切し口をきく  
しし押し心掛し武士をも押込む大臆病  
の輕信者程時不達てすむふり次方小  
武彦をもいさく家云しものし子細不達して  
柔弱なり家を武彦の達人生時名を見合  
し必生家を討取物を武家いけなす臥下  
武彦の妻さる家繁昌を執事さる汝等  
威を振ひ諸士の頭残たす諸人の勇氣さ  
るる將軍の爲ふ大敵を

一 又上意お忠信は大小下近習外根古系親系  
小もする物も只人の心ふるまを御時江に  
諸人お心奪あてりい生志の埋れたる根古系  
忠信を尽すは海ふるまを諸人地ふり  
へ根不成時江も上位も天ふのかり下位  
地ふふるまを時君長間意より縁切  
れと家滅亡するも想して主人家老の前  
も少くは礼お見ゆる程成志の多分陰程  
上成たふお思ふ物も家老お歎なりとも海先

の考ふらふ法人お意外を時も法人非厚  
ご恨むものもは考ふらふ法人のまじまじ  
すを御是し歳うけふ名く春も老も  
けれ頂上之若是不好をゆるむよあはりの  
孫甲前泰の趙高の類之又人お意外を仕無れ  
て何とも思ひぬ者も何の役も立ぬ物も  
心得ししや用侍時運ふりてこそ  
まじなり家老出頭をなま法侍となふ意  
分は時ふまじたりとも法人お意外は候

編者有るは其志願より天下此のいふ  
及は國之郡王家中にも奢者も其不成  
婚不有りは家不下甚々家歎小笠原監也を松  
遊流人せしを監禁一原下野、困り立  
漁業者はれども滞り五之取以集旗本法大  
名諸家中、その奢者も奢る者も其の  
近くは是れ甚くは聞せ奢者、其の漁業者、其の  
如きも其れ甚くは木村常法を早く成敗し給  
り、其れ悪し是れ奢者も有る、其れ悪

一 奢者も成敗し給りて心底不納の能くは其れ  
生成敗を成し、其れ悪し、其れ悪し、其れ悪し、其れ  
天下此のいふ、其れ悪し、其れ悪し、其れ悪し、其れ  
其れ悪し、其れ悪し、其れ悪し、其れ悪し、其れ  
奢強き者あり、其れ悪し、其れ悪し、其れ悪し、其れ  
治者第一の法なり

一 又上意不酒井備後、其れ悪し、其れ悪し、其れ悪し、其れ  
あり、備後、其れ悪し、其れ悪し、其れ悪し、其れ悪し、其れ  
い、其れ悪し、其れ悪し、其れ悪し、其れ悪し、其れ悪し、其れ

彼百姓を呼ぶ一名を之と云ひければ百  
姓中も迷惑成儀を治さるれば人小賤れて  
所年貢一番の上納仕生上御公後も能仕小  
十戸ふて治さるゝと云ふは生上私には所  
少て代し備後少くも御留留留りて能成儀  
只殿様の所名所治さ成れば小と申ければ  
酒井備後といけり米貢を能納め公役を能  
治めよと一帳の事と己ハ此所の備後之を  
よと治めと云ひと云ふと御治め成熱して

備後といふも生付温私者之智慧といひ  
慈悲深き者なり見れば子孫繁昌申御事  
と熱して安智恵なるものハ何の益も甘き  
事小徳人をつまか困小亭を取失ふ也  
されも専ら利口の者れば治さるゝといふ智深  
ものなり彼孫四郎已り知行の扱成を己の  
領りの百姓をも借一利米を取己ハ我れ  
けとく米を治ひと成り是備小武士の  
為を知りて申り尤我れを治さるゝと云ふ

かかれともや初のもの、町人の業成ふより武  
者より大成成なり又本多作態を以りし  
時三別坂濟の百姓跡を以て願ひしり  
作態の依怙ありと方々かく云ひしり落書  
落文おしければ作態をす付二度後  
しては百姓を切しり之後又酒井雅楽頭  
也のの公よりし時右坂濟の百姓のとく  
悪くしければ雅楽をす付し地下人を  
呼ひし之を云ひしすせしを分して其中を以

人の為理を測ふ作態の中を犯す者を定  
分して墨色をまはりずと云雅楽の中を  
也初成者を切しり手くなりし後出来れと  
之り尚書尔徳惟苦政在養民云我は  
全言然不敷不志百姓の諸役のり能吟味  
金銀米穀の来貢より外にふても不筋は  
の換値は依度不能く習ひて是れ徳せし  
智成者必形を取ても其後を知りしれ  
智と身者の批判は可笑なり泉別塚の



町人批判侍小西探州肥後守 萬石百丸  
と云ふいふ浪子一貫同し、さうり 常と云ふ沙  
汰之長流のいふ、<sup>武いふ</sup> 浪の知れぬふ、と云ふ浪  
子十萬貫目餘持、<sup>武いふ</sup> 武士程の巻と  
なき者も、さうといひ、いふと、兼盛の、<sup>武いふ</sup>  
抱持せしと云ふ矣、<sup>武いふ</sup> 町人の、<sup>武いふ</sup> 祈り、<sup>武いふ</sup> 金銀を  
いふ之遊山法外の事、の、<sup>武いふ</sup> 好む、<sup>武いふ</sup> 衣服を知り  
義理なり、他人の迷惑を考へ、<sup>武いふ</sup> 己の樂より  
ん然と、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 愚成者、<sup>武いふ</sup> 四郡、

定つて我物との、心は領家の民を、<sup>武いふ</sup> 私  
欲、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 悲、<sup>武いふ</sup> ぬる、<sup>武いふ</sup> 四郡を、<sup>武いふ</sup>  
家、<sup>武いふ</sup> 失、<sup>武いふ</sup> の、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 我物、<sup>武いふ</sup> な、<sup>武いふ</sup> ぬ、<sup>武いふ</sup> さ、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup>  
我物と思ふ、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 然、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup>  
己、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup>  
仁、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup>  
と云ふ、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup>  
生、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup>  
己、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup> 己の、<sup>武いふ</sup>

生器量不尚る素小武那をありゆるま下此之  
の故有り是小依怙を我氣不愈しゝる  
者ふ小任那の者し武那をあ之武氏を苦  
しめぬ天下のふれ温平そ天及是を中  
給ひ怒武家を失ふを他の非を改くより自  
前れ他を淨く改めよ若し前の思案不劣れ  
古遠まの時も家人の内忠信作し我しる  
しし小思ふ者程却てよむきい武のふ思ふる  
やふ小思ふものそ我れ武前を免せし時我れ家

法し小思ひ入我小命をよめ兵し忠臣を  
め初るるを必自花の曲尺を能定めよ

一  
又上喜小武を案内の者ハ侍の嗜と奢と  
を取ちゆる物と嗜と云ハ道反むとの如く似  
合する事す仕相夕のいゝあゝりふふ身  
者し大形がをりて身体より色分ふ人  
馬を持充武具馬具まゝひやふ仕常小家破  
を忘れ是非を能中誰り花少し理に理  
非も他と云者なり是成者といふ云案内と

是を侍の本意嗜ししを奢とししは家祿を  
失ひ武家も公家を享ひお家百姓町人武  
家を享ひ我家祿を承ふる者を信者とし  
しを天子の御誓ふ六月朔日朝拜ししを  
次の御祭りにしを是天子の御家祿を  
闕白し天下を解り政を安んずる人民憂む治  
を成し是文となり將軍は天下の悪を成  
討て有るをいふことを成し是武を成し是  
上代の法を承ふ中世より君臣奢弱して

政を取失ひ人民安んずるを承ふ頼朝も家  
をうち本を成し一諸國の惣追捕使を法を  
天下太子と成徳倉三代北条九代の法天下  
大いし乱事此時尊氏武勇しく天下過半  
治を義満の世より天下統一統小太平之武威  
を和清小景を中身の位奨享淳和西院  
列為源氏長者征夷大將軍大政大臣二位  
准三后公方義満贈法皇を号し明の成祖  
より祭文小恭献す承ふるは義満を

祖父親の遺りを承く。是を空しくせず。天下  
を治平し。兵禍を止む。其の若者といふ者  
あはれ。是武名無業内の沙汰。子細停罷。  
了合。若者。王と云。天下を治る人。より  
後。時は天下。治る。高徳。子。定。ま。る。  
り。を。終。ふ。尊。氏。并。代。足。利。義。政。の。将。軍  
と。号。し。た。る。天下の礼を治る。り。を。も。努。め。  
心。懸。く。只。茶。の。湯。ま。り。小。心。を。用。ひ。東。山。小。引  
菴。り。て。東。山。殿。と。呼。ま。る。不。覺。悟。人。を。著。り

かき人といふ大成癖のなり。は義政を修り  
者。う。け。者。と。ま。ふ。子。細。我。は。不。勤。して。茶。の  
湯。ま。り。小。心。を。用。ひ。先。祖。の。功。を。寧。ろ。す。は。大。か。り。  
香。を。家。を。破。る。者。我。は。不。勤。ぬ。り。成。す。  
若。者。壁。も。松。と。き。い。の。色。か。れ。よ。花。か。き。  
ゆ。景。か。し。て。花。を。松。も。せ。松。も。花。も。花。  
の。表。か。し。い。や。是。を。も。て。拵。ひ。後。不。は。花。の。盛。  
長。し。て。松。を。卷。く。り。花。も。も。不。枯。ぬ。り。花。も。  
義。政。と。り。武。名。も。松。も。茶。の。湯。の。煎。を。も。て。

一 松藤ともに枯ぬる能く人の有き所へ  
又上意小武家は武藝を志建さざる能き子細  
太平なりとも武家公家の如く小成て柔  
弱尖鋭或好む壁も亦劔ハ困なりとも木  
刀をさす小似り又將軍を妬め此も郡も小  
勇を好く軍法を不用ハ木刀小狭小刀をさす  
同ハ武藝を不好く柔弱をとりとすハ木  
刀小木小刀をさす不同ハ此類の武士大身程  
味方少く必災となり敵おして味方小大利

あり又小身よりとも武藝の達人ハ敵おして慢  
建ハ味方少くやむあり小人數おて大事ハ  
先ハ不用ハては特ハかや大勢なりとも武  
為空軍内の大将を先ハ不用ハ事ハ此先ハ  
の大<sup>事</sup>の崩建さるるハ味方の禍と感て自  
然のりら之時も先ハを能ハ會後せよ昔  
異言より日本を攻んとするは武内大臣九  
刺小立て異言を押しら建するを是即劔の利  
を打とりてのりは劔切先の金錢第一小吟

味をそそ子細切を臣先敵も中を奪り或は  
切或は実き肝要の石は取ら日本の大先  
手小津代も任者大明神人代を武内大臣  
を置きいをも今以ては人を失ふ趣くは右  
をい聞かすもく吳公礼すと聞か九州小能武  
將を撰く吳公を押させよ日本の中の軍の  
勝負も小生一家まりの盛衰を和漢のあ  
りまひ負ふ時日本國の恥辱勝て日本  
國代を建てる吳國の石あひ程大の成り

若し吳公礼を以ん得ふて押を撰く給  
といふもそ文永弘安も吳公人渡りし日  
本数代治平の事を元の世祖能く聞き又  
蒙古武勇も濟すの事を文祿の朝鮮征  
伐のよし朝鮮数代治平成成る柔弱やて  
武勇事を忘れしと秀吉武勇も濟りし  
とよの二ツを御ふ武勇を案内の者太平の  
武勇を石失ひ彼木刀を用ふ似たり木刀  
形ハ刀小似れしとよの困りし武勇を案

内の武士、我は武士なりて、用ひ百姓町人小  
をとれりけ、我小武家、武名不達、其を家藏  
を知りて、天下の大寶有り、我れとも、空業内  
成者、武名を血業を取、遠中を空業を討て  
人氏を安堵さるるを、武名をいふ、是則天下  
乃これ後有り

一 偏重飾至人をいふ、是をいふ、以徳をいひ  
結句人能知りし、その何程、正前不能と思ひ、  
人氏とむ、惡事、我何程、奢りなきと思

ひてし、諸人奢り者、いふ、則修り、只外人の  
沙汰を能す、尤、旗本天下に、諸大名家々の  
家老、お頭、乃、若の、告、惡、切、手、失、其、事、ま、り  
心の及、ふ、程、は、聞、き、生、改、名、改、り、か、り、一、治、必  
かりと、櫻、り、小、遊、山、安、樂、坊、好、み、武、名、を、取  
失、小、家、は、必、欲、得、き、し、の、を、是、空、業、の、祝、と、さ、る  
本、を、治、世、小、武、名、不、達、を、我、空、の、武、名、を、云、至  
紀、業、武、名、を、か、せ、く、い、ふ、は、寒、を、ふ、せ、き、る、風  
を、求、ふ、同、一、強、れ、も、武、名、を、業、内、の、者、も

皆なき他必を討取擧り小戦をせし事を  
武蔵といふ莫之り是武蔵不妄用の  
そ尤邪惡を討く有為の人をそつを武蔵  
といふ又太田上守才己の身の分限を  
て侍らり然れども彼といふにあま云ひせ  
給ふ將軍の心然誠不日出度事不秋万歳  
と思ひ女堵不色之太田所存は毫外をい  
なきも忠信子細も知り功もあらずも過不  
及百之時満まらん誠を失ひ身の程を不知

能者いふれば輕薄者はまひこる物を武士  
身の程を知らず第一也満人身の程を知らずハ  
政不礼一々家長久そ彼太田小知り一字  
石給り可辨し一々若史少し吳侯を  
あま又まや中越さるゝもの上意なく返す  
あまを深く恨くま公せよ世の初ひして  
將軍乃目く孫を遠中も満人不意外する事  
され尤毛頭も奢るゝ天下國家并遠  
より人々姓も武蔵もまを著る乃心



大事の成敗

人多し人れ中より人をも手

くとすれ人をもなむし

諸人より其家職を深く心付けて人と成り  
自ら家職を能く務むる者取立となり給  
ふとトト返すも天下必家のまはるる旨の旨  
要を告げの元も慈悲を慈悲を美の根元  
とて傳をいなり天下を治す給くとトト  
又汝より忠義に正忠慈悲を好む賞罰も私意

やふ心を尽し天下に諸士將軍の徳義ふ  
たかく振ふする忠義を咸陽宮は咸陽宮  
亡し平家、平家、亡し鏡倉、鎌倉の亡し  
家も家も亡しを返すも告げの天下必家れ  
要と知事との上意にて御暇を下げれま  
計敷御懇身も餘り涙もむせし御若殿  
罷立はすく下上上意の趣を相圖極く言上  
仕ぬす相出極上意傳し駿河様御苦勞  
浅くも御事奉らふに下條に誠も骨髄も

入り難き御事とて御渡談を促し計頭  
御前小松の内小折紙を沙汰せさせられ  
太田を立直り知り二千石を引かれ太田洞を  
流し御折紙をいづき御前を退出せし  
時相公極上意小松の太田の洞小松は  
良後の失事事を愁く家小はより子の地中  
を悲むといふも激有り汝一言不依て孝行不  
しとるき天下を治むるを問うりと依御收  
ひ事し計頭丸文字に御刀をとりける

此書は唐長の末の比 家康公駿府に在  
城の時將軍秀忠公より井上三計頭を  
御使とて召巻也(す)三計頭を数日駿府の  
殿中小御留置させ 御前より 籠り  
天下の政を御教訓と成れを委り取られ  
覺えに等し歸り 秀忠公に 井上三計頭  
計頭を不書並せし書也

稽德編卷之二

